

ハインリッヒ・フォン・クライストのノヴェレ 『聖ドミンゴ島の婚約』について

—— „Mißtrauen“ を中心にして ——

南 勉

序

詩人が当該作品の構想を練ったのは、1802年～03年と推定されている。当該作品の素材は、ラインフォルトの『ハイティ島物語』（1806）、ドゥプロカの『聖ドミンゴ島の暴動物語』（1805）に依っているとされる。

当該作品をめぐる解釈は大きく二分される。古典的研究書は、作品の一つの中心点である白人と混血娘の結婚をあまりにも楽観的に理解している。その代表は、W. Herzog と F. Braig¹⁾ である。それに対し、この結婚をそれ程楽観的に理解しないのが最近の研究である。この点を楽観視することは、作品を解釈する上でかなり危険であるように筆者には思われる。従ってこのような理解に対してまず疑問を呈しておきたい。

さて当該作品の背景は、「白人—黒人」対立である。この対立自体は、それだけでは作品の内容と本質的関連をなしてはいないが、しかし、作品に一貫している不信の念と深く関わっている。従ってこの対立から分析をはじめてゆかねばならない。そして当該作品の中心モチーフである《不信》について論述してみたい。この《不信》は、作品の基底をなし展開の動力になっている。そしてかくして作品の悲劇的核心へと肉迫してみたい。

I

当該作品の背景は、先述したように「白人—黒人」対立、あるいは図式である。そこでここでは、まず黒人を考察してみよう。黒人と言ってもここでは、Hoango と Babekan の二人である。

まず Hoango に視点を向けてみよう。彼の意識は、白人に対する不信の念と

1) W. Herzog: H. v. Kleist, S. 596 F. Braig: H. v. Kleist, S. 457

憎悪に満ち満ちている。彼は、アフリカ黄金海岸出身の「恐ろしい老黒人」であり、「若い時には誠実で実直であるように思われていた」²⁾と規定されている。「誠実実直」と「狂暴」とは全く対立する性格である。確かにこの両面があるように思われるが、前者が発揮されるのは、具体的には一回きりである。つまりそれは、彼が「キューバ渡航の折、彼の主人ギョーム・ヴィルヌーブ氏の生命を救った」³⁾ことだけである。従って「誠実実直」という性格は、「狂暴」という性格に比べ、大きな意味を持ってはいない。「……誠実で実直であるかのように思われていた」という表現は、この点を端的に示唆している。この「誠実実直さ」を痛感したのは、ひとり彼の主人ヴィルヌーブ氏のみである。従って彼は、Hoango に感謝の念を表して「彼にすぐさま自由の身分を与え、そして聖ドミンゴ島に帰ると家屋敷を与えただけでなく、数年後土地の習慣に反して自分の相当の財産の監督者」⁴⁾にまでしている。さらに彼は、再婚の意志のない老黒人に、自分の先妻の遠縁にあたる Babekan を妻がわりにあてがい、そして「この黒人が六十歳に達した時、かなりの俸給つきで引退させ、恩賞の最後を飾り、遺言書の中で彼に対する遺産分配をさえも約束」⁵⁾している。ヴィルヌーブ氏の感謝の表明は、はるかに予測を越えている。老黒人の「誠実実直」は、ひとりヴィルヌーブ氏にとってのみ、大きな意味を持っているのである。しかしこの性格は、前にも述べたように、もう一つの性格に対比されるべきものでは決してない。と言うのは、ヴィルヌーブ氏がいかに善意と恩賞の限りを尽しても、老黒人の白人に対する不信の念と憎悪は、決して消失しないからである。否、それどころか、黒人の憎悪は増大するばかりである。

...Congo Hoango war, bei dem allgemeinen Taumel der Rache, der auf die unbesonnenen Schritte des Nationalkonvents in diesen Pflanzungen aufloderte, einer der ersten, der die Büchse ergriff, und, eingedenk der Tyrannei, die ihn seinem Vaterland entrissen hatte, seinem Herrn die Kugel durch den Kopf jagte. ⁶⁾

2) H. v. Kleist, Sämtliche Werke u. Briefe 2. C. Hanser Verlag (以下 Werke と略記) S. 160

3) *ibid.*, S. 160

4) *ibid.*, S. 160

5) *ibid.*, S. 160

6) *ibid.*, S. 160

引用から明らかのように、彼の行動は残忍である。彼は、自分の主人を殺害したばかりでなく、主人の家族が逃げ込んだ家屋に火を放ち、農園を荒らし、黒人たちを武装させて白人の旅行者を待ち伏せしたり、傍の白人を惨殺したりと残虐の限りを尽している。さらに彼は、この残忍な暴動に **Babekan** や **Toni** をも参加せしめている。このように彼の暴虐的行動には限界はない。彼にとって白人は、たとえ彼とは無縁であっても皆敵なのである。この原因は、これまでの白人の暴虐的支配に端を発する不信の念と憎悪である。

次に **Babekan** に視点を転じてみよう。彼女の発想の原点も、**Hoango** の場合と同じように、白人に対する不信の念と憎悪である。このような思念を **Babekan** に抱懐せしめた原因は、彼女の白人の恋人の変節的背信行為である。

... Herr Bertrand leugnete mir, während meiner Schwangerschaft zu Paris, aus Scham vor einer jungen reichen Braut, die er heiraten wollte, die Vaterschaft zu diesem Kinde vor Gericht ab. Ich werde den Eidschwur, den er die Frechheit hatte, mir ins Gesicht zu leisten, niemals vergessen; ... 7)

恋人の変節的行動が、若い **Babekan** にいかに大きな傷を与えたかは、上述の引用から容易に推察できよう。この体験は、彼女の心に不信の念と激しい憎悪を刻みこんでいる。加えて彼女は、この体験が原因で今でも肺病に苦しんでいる。この体験は、彼女にとって絶対的であり、従って彼女は、白人に対する不信と憎悪を払拭することはできない。彼女は、完全な黒人ではないにも拘らず、発想の根底において **Hoango** と軌を一にしている。よって彼女は、彼の命令であればそれがいかに残忍冷酷であろうとも、それに唯々諾々として従い、自分の娘にも協力を強要する。彼女は、白人を命令通り **Hoango** に引き渡すこと、それが不可能な場合奸計を弄して自ら殺害することしか考えていない。彼女の娘が彼女の奸計や企図に対して批判的になり、それに従わない時、彼女は娘を敢えて「裏切者」呼ばわりしてはばからない。彼女が憎む白人は、ひとりかつての恋人のみならず白人一般であり、彼女は自分とはおよそ無縁で善良な白人を殺害することに、いささかの痛みもこだわりも感じない。彼女にとって黒人同盟は、無条件に優位を占め、親子の絆はそれを前にしては大した意味をなさない。娘が白人に与すると彼女は、娘に対して呪いの言葉を発してはばか

7) *ibid.*, S. 169

らない。彼女は、目的や理由は問わず自己の企図に従事する恐しい存在である。当該作品における最も大きな比重を占める黒人は、他ならぬこの **Babekan** である。

以上考察したように、**Babekan** も **Hoango** も、白人に対して不信の念と憎悪を抱いているという点において変わらない。**Hoango** は力によって、**Babekan** は奸計によって「かのように」の仮面をまとして白人を死すべき運命へと到らしめる。黒人の念頭には和解はない。従ってこの対立の解決はありえない。それ故白人は、黒人に対して不信の念と不安を抱懷せずにはいられないのである。

II

さて、次にここでは白人を考察してみよう。白人と言っても具体的には **Gustav** 一人である。彼を考察する際看過できないことは、彼の過去の行動である。彼は、革命議會を公的な場で批判し逃走する。そのために結婚を約束した彼の恋人が、彼のかわりに犠牲に供せられる。この恋人については後に詳述するが、彼は彼女を救出することができない。この事実は、彼にとって大きな意味を持つ。つまり彼の行動は、死という不安からの逃走に他ならず、従って彼は、積極的に現実に関与できない存在である。彼が故国スイスを去るのもこのためであろうし、聖ドミンゴ島に来たことを後悔するのもこのためである。このように彼の過去の行動は、不安からの逃走・現実の逃避という行動原理に立脚している。しかし、悲劇的なことに彼は、この事実に気付いていない。従って彼は、苦悶を余儀なくされる。恋人の死後彼が失神をくり返えずのは、自分の無責任な行動に起因する自責の念のためである。

彼が積極的に関与しない時、そこに不信の念があることは言うに及ばない。黒人に対する不信は、その延長線上にある。彼も他の白人と同様に、強い不信と不安を抱いている。彼は、ある夜 **Babekan** と **Toni** の住居に辿り着き、この住居が **Hoango** の所有であると知った時、「はやくも少年を突き倒し、その手にしていた門の鍵を奪って逃げよう」⁸⁾ とする。そして若く愛らしい **Toni** に対しても「合点の行かない思いで抵抗したり」⁹⁾ して、彼女を決して容易に信じたりはしない。ここから彼の黒人に対する不信の念が、いかに深く内在化し

8) *ibid.*, S. 163

9) *ibid.*, S. 163

ているかが、はっきり理解できよう。

彼が、強い不信の念を抱くのはかかる状況からして決して不思議ではない。この不信の念があまりに強いため、彼の内面にはある特性が生じてくる。つまりそれは、強烈な不信のために理性の働きが停止して「感覚的印象に左右される」¹⁰⁾ 特性である。彼は、**Toni** に対してあれ程の不信の念を抱きながら、彼女よりも色の黒い **Babekan** に対して、彼女の巧みな奸計に誘導されて自己の置かれている状況や自分の素姓などを、およそ予測し難い程容易に表白してしまう。そして白人に対して激烈な憎悪を抱くこの女性の嘘を、疑うどころか完全に信用し、彼女を自分の味方と信じさえるのである。ここには明らかに分裂がある。彼は、決してこの分裂に気付かない。つまり彼には、真相を認識する冷静さが欠如しているのである。何故なら殺害されるという不安が常に彼の心中を支配しており、この不安が冷静さを消失させるからである。そしてこの不安が弱められた時、つまり身の危険がなくなった時、今度は所謂彼の「素朴さ」が顔をのぞかせる。このように彼の意識は、不信の念と「素朴さ」との間でゆれている。彼が **Babekan** を信用するのは、彼の不安が一時弱められたからに他ならない。彼は、真相とは無縁のままに感覚的印象に左右される存在であり、この特性は、彼の不安からの逃避という行動原理と決して矛盾しない。

このような面は、**Toni** との関係においてより明白に表われている。彼は、**Toni** に対する不信の念を捨てきれない。彼は、彼女に黒人の残忍無比な娘を対置するのである。この黒人娘については後に詳述するので、ここでは白人に強い不信と不安を抱かしめる冷酷残忍な娘と述べるだけにとどめておこう。ところで **Gustav** は、彼女に対する不安を捨てきれないが故に「彼女が、およそやさしい心を持っているのかどうかを試そうとする」¹¹⁾ のである。このように若く愛らしい娘を前にしても、彼の不信の念は決して消失しない。彼は、**Toni** と二人きりでいる時不安に心を領され、このまま仲間一族のもとへ逃げ帰ろうとさえ思う。しかしながら彼は、他方で彼女の魅力的な形姿に対して自己の欲求を抑止することはできない。というのは彼女の魅力もさりながら、不安が強いため、彼はその場の感覚的印象に支配されているからである。

...; er hätte, bis auf die Farbe, die ihm anstößig war,
schwören mögen, daß er nie etwas Schöneres gesehen.¹²⁾

10) B. Beckmann: Kleists Bewusstseinskritik, S. 103

11) Werke, a.a.O., S. 172

彼は、引用からわかるように、Toni を美しいと思いながら、決してある一点を看過していない。それは、彼女の膚色である。つまり彼女の中にかすかに流れている黒人の血が、彼の心にかすかに不信の念を呼び起しているのである。一方彼が彼女の中に他界したかつての恋人を連想するのは、彼の心を領している不安を無意識に払拭しようとしているからに他ならない。従って彼女が彼の胸に身を投げかけた時、彼は彼女の愛を感じ取るわけではない。唯彼の心中に巢食う不安と不信が弱められるだけである。それ故彼は、二人が情愛を交えた後、少くとも彼女についてだけは不信と不安を当座のところ忘れるのである。

...Der Fremde, als er sich wieder gesammelt hatte, wußte nicht, wohin ihn die Tat, die er begangen, führen würde; inzwischen sah er so viel ein, daß er gerettet, und in dem Hause, in welchem er sich befand, für ihn nichts von dem Mädchen zu befürchten war. 13)

このように彼は、情愛を交えた後自分の身が助かったということ、そして Toni について恐れる必要はないということを感じ取っているだけであり、彼女の愛と誠意は問題にもならない。従って Gustav の意識に映る二人の關係に、愛は一切介在していない。ここにおいても Gustav は、感覺的印象に支配されている。

...Er schwor ihr, daß die Liebe für sie nie aus seinem Herzen weichen würde, und daß nur, im Taumel wunderbar verwirrter Sinne, eine Mischung von Begierde und Angst, die sie ihm eingeflößt, ihn zu einer solchen Tat habe verführen können. 14)

Gustav が愛と言う時、この語は決して言葉の本来の意味において使われてはいない。引用から判然としているように、この „Liebe“ という語には、„Angst“ が対置されている。„Liebe“ は、彼の意識の中では „Angst“ に従属している。これは、決して愛ではない。従って彼の言う „Liebe“ は、彼を

12) *ibid.*, S. 172

13) *ibid.*, S. 175

14) *ibid.*, S. 175

„Angst“ から解放してくれる一手段にすぎないのである。

以上考察したように、Gustav は、積極的に現実には関与せず、不安からの逃走を行動原理にしている。そして感覚的印象に常に支配され、真相を認識する冷静さは備えていない。彼は、殺害される不安から免れるためにのみ行動している。これほど深く彼の意識の中に不信の念が内在化しているのである。

III

白人と黒人の相互の不信は強く、決して消失はしない。このような対立の中で、その中間的立場にるのが Toni である。従って Toni の果す役割は重要である。ここでは Toni に視点を向けてみよう。

Toni は、十五歳の黄味をおびた „Mestize“ と叙述されている。„Mestize“ とは、白人と黒人の混血児と白人との間に生まれた混血児である。Hoango は完全な黒人、Babekan は黒人と白人との混血児であり、Toni は、色も黒くはない。このような規定は、彼女の中間的位置を巧妙に示唆しているように思われる。彼女は、人種上白人に最も近い存在である。彼女は、ある時点を境に変化する。従ってその前と後とをわけて分析してみよう。

変化する前の彼女は、自己の意志を持っていない。彼女は、従って母や Hoango の命令に従い、黒人側の奸計が暴露されないように配慮している。そして彼女は、母親と同じように、黒人の企図に関与して白人を死へと到らしめることにいささかの痛みも感じていない。彼女が夜白人を迎える時自分の黄味がかった顔にランプの光があたるようにしたり、膚を許すことを除いて白人の要求に応じたりするのは、黒人の企図を成功させるための一策にすぎない。彼女は、Hoango や Babekan のあやつり人形の如き観を呈しており、個の意志は持ちあわせていない。この段階の彼女は、何の疑念もなく命令に唯々諾々として従う黒人同盟の一構成員にすぎないのである。

変化した後の Toni は、非常に重要な役割を果す。彼女が変化した原因は、Gustav との交わりである。彼女の意識が変化した理由は、第一に彼女は十五歳の少女で偏見にとらわれていないことであり、第二に彼女には Babekan や Hoango のように白人に対する不信の念や憎悪を直接的に痛感する直接的絶対的体験がないからである。それ故彼女には黒人の行動を批判的に見つめる観点は過去なかったわけである。彼女の発言の中には、白人に対するものであっても偽りはなく、彼女の母の発言のような巧妙な嘘は言うまでもなく含まれてい

ない。そして白人に対する不信や憎悪の表白も全く含まれていない。この点において、彼女は **Hoango** や **Babekan** とは一線を画している存在であると言える。これまでの彼女は、自己の置かれている状況や与している企図をより客観的に認識する契機がなかったため、未発達な段階にとどまっていたのである。このような彼女に人間的感情を覚醒させたのは、**Gustav** との対話である。彼女は、白人に膚身を許すことを死刑をもって禁じられていたにも拘らず、**Gustav** に心身ともに捧げてしまう。そして彼女は、**Gustav** とは異なり彼への愛に自己の全てを託してゆく。ここで彼女は、以前の自己から完全に脱皮し、彼女の中ではじめて黒人同盟が相対化されるのである。彼女の自我が開花し、存在の基軸が完成し、彼女は以前のように母親の命令に決して忠実には従わない。それどころか黒人の傍若無人の残忍なふるまいを厳しく批判さえるるのである。

...Toni, halb im Bett aufgerichtet, indem die Röte des Unwillens ihr Gesicht überflog, versetzt: daß es schändlich und niederträchtig wäre, das Gastrecht an Personen, die man in das Haus gelockt, also zu verletzen. 15)

Toni のこの陳述は、黒人の残忍な企図についての一般的批判であるが、彼女の中に批判の視点が備わっているという点が、大きな特徴である。しかも黒人の企図を „schändlich“ にして „niederträchtig“ と規定しているのには注目すべきである。ここで明らかなように黒人同盟は、完全に相対化されている。

...„Was hat uns dieser Jüngling, der von Geburt gar nicht einmal ein Franzose, sondern, wie wir gesehen haben, ein Schweizer ist, zuleide getan, daß wir; nach Art der Räuber, über ihn herfallen, ihn töten und ausplündern wollen? Gelten die Beschwerden, die man hier gegen die Pflanzer führt, auch in der Gegend der Insel, aus welcher er herkömmt? Zeigt nicht vielmehr alles, daß er der edelste und vortrefflichste Mensch ist, und gewiß das Unrecht, daß die Schwarzen seiner Gattung vorwerfen mögen, auf keine Weise teilt?“ 16)

15) *ibid.*, S. 176-177

16) *ibid.*, S. 177

Toni のこの発言は、決して看過できない。彼女は、白人のかつての横暴についてはそれなりの認識を得ている。しかし彼女は、母親とは異なり白人一般に対する不信の念や憎悪は抱かない。彼女は、Gustav を白人として一般化した存在とみなすのではなく、自分と直接関わりをもつ人格として素直に理解し認識している。そして彼女は、自己の目で理解しその存在を容認したものを守ってゆこうとしている。彼女は、Gustav を愛するようになってから自己の確固とした意志と判断とを保持しており、母親のように偏頗な先入観にとらわれてはいない。彼女は、自己の判断に基づき、自己の意志に従って、積極的に現実に関与する人間へと変容しているのである。

変化した彼女は、母親とは異なる立場にあり、彼女をめぐる客観的状況は決して有利ではない。そして彼女もまた、この事実を的確に認識している。というのは、Gustav を愛し守るということは、彼女にとって愛を貫くことであっても、彼女の母親にとっては反逆を意味するからである。彼女は素朴であるため、かかる状況において無力に等しい。一方彼女の母親は、狡智を兼備し、加えて Hoango という悪鬼を後楯にしており、Toni とは比較にならない力を、ゲバルトを確保している。従って Toni は、自己の意志をいかに強く表明しても、後には母親に謝罪するという分裂した行動をとらざるをえない。

...,Beim Himmel, diese deine Erklärung rettet ihm für heute das Leben! Denn die Speise, da du ihn in deinen Schutz zu nehmen drohtest, war schon vergiftet, die ihn der Gewalt Congo Hoangos, seinem Befehl gemäß, wenigstens überliefert haben würde.“ Und damit stand sie auf und schüttete einen Topf mit Milch, der auf dem Tisch stand, aus dem Fenster. 17)

この引用から黒人同盟に与せぬ Toni が、いかに厳しい状況に置かれているかがよく理解できる。彼女の主張やそれに基づく行動は、いかようにしても容認されることはありえない。彼女は、それ故一貫した行動がとれないので、母親の面前ではその命令に従い、それ以外の場では秘かに自分の企図を実行に移すより他になすべき術がない。行動には分裂はあるが、しかしながら意識の分裂は全くない。彼女は、状況を的確に認識し、現実の場で冷静に自分のかかえる問題を解決すべく努力している。彼女の愛は、決して夢の中でしか実現しえ

17) *ibid.*, S. 178

ないようなものではない。Gustav の Toni との関わりは、彼自身の不安の解消を前提にしているのに対し、Toni の場合は、身命を賭して愛する人の生命を守ろうとする努力である。従って Toni は、Gustav が懸念する《不信》とはおよそ無縁な、彼にとって信頼できる唯一の存在なのである。

IV

変容した Toni は、母親とは必然的に対立し、母親から不信の念を持たれている。一方悲劇的なことに Gustav は、Toni の彼に対する細心の配慮に気がついていない。従って彼女は、黒人同盟の域は脱しながら、Gustav の意識の中で彼の拠り所とはなりえていない。この意味において、彼女は完全に孤立した存在である。それでは彼女は、彼の意識の中でどのように映っているのだろうか。ここではまず、彼女にまつわる二人の女性像を考察してみよう。

第一番目の女性は、Gustav のかつての恋人 Mariane Congreve である。彼女は、Gustav のために犠牲に供せられ殺害される。彼女は、刑の執行に際して刑場に出現して身元証明をする Gustav の姿を見出しても、彼自身であるということを決して容認しない。そして彼の方から視線をそらして次のように叫ぶ。

...: ,diesen Menschen kenne ich nicht!“(18)

この言葉を最後に彼女は他界する。彼女は、無実でありながら、Gustav と結託しているとみなされ処刑された。L. Hoverland は、彼女のこの発言を彼女の Gustav に対する愛や誠意ではなく、彼の裏切りによる痛みと抱えている¹⁹⁾。この解釈は、実にユニークではあるが当を得ていない。このように解釈するとこの女性は、内容と内的関連をもたなくなってしまう。この発言は、自分の恋人を救おうとするためのものとしか解釈できない。少なくとも彼女の像は、Gustav の意識の中にこのように映っている。彼女は、恋人のためなら敢えて死をも辞さない存在である。彼女は、彼にとって全面的に信頼できる天使のような存在なのである。

第二番目の女性は、ある黒人娘である。この娘は、白人の暴虐なふるまいを

18) *ibid.*, S. 171

19) L. Hoverland: *H.v. Kleist u. das Prinzip der Gestaltung*, S.156

受けたために白人に対して激しい憎悪を抱いている。彼女は、暴動が起こり自分のかつての主人である農園主が黒人に追われ近傍の材木小屋に潜伏したのを知ると、弟を使いに出して自分のもとに泊るように誘惑する。すると彼女が病気にかかっているということ、どのような病気かも全く知らないかつての主人は、身の安全が保障されたと思い、欣然としてこの娘のもとへ赴く。彼女は、情愛を交えた後、忽然として言う。

...; Eine Pestkranke, die den Tod in der Brust trägt, hast du geküßt: geh und gib das gelbe Fieber allen denen, die dir gleichen²⁰⁾

この黒人娘の発言は、名状し難い不快感を与える。この娘のイメージは、ミルクに毒を入れた **Babekan** を想起せしめる。彼女は、明らかに黒人同盟の忠実な **Dienerin** に他ならず、「白人—黒人」対立の枠から一步も出られない存在である。従って彼女は、白人にとって不信と恐怖を抱かせる存在である。**Gustav** にとって彼女は、典型的な黒人であり、唾棄すべき人間である。

二人の女性について分析したが、この二人はそれぞれ全く異なっている。一方が献身的であるのに対し、他方は悪魔的である。**Gustav** の脳裏にはこの二人のイメージが宿っている。この二人のイメージは、**Gustav** が女性を判断する基準になっている。**Toni** を見る場合も決して事情は異ならない。再三述べているように、変容した **Toni** の人格は、**Gustav** には認識されていない。従って **Gustav** は、**Toni** の本質を認識していないので、二人のイメージを基準にしてその場その場で判断を下すのである。彼は、当初彼女に後者のイメージを適応する。これは、彼の置かれている状況からして決して不自然な判断ではない。黒人は、白人を皆殺しにしようとしており、黒人の娘は白人に対して恐しい復讐をとげているので、**Toni** に対して彼が後者のイメージを抱くのは、むしろ当然と言えよう。彼は、次の段階で当初とは異なり、**Toni** に対して前者のイメージを適応する。従って **Toni** のイメージは、対極から対極へと変化したわけである。悪魔から天使へのイメージの変化である。このイメージの変化は、たとい **Gustav** が彼女の本質を認識していなくとも、変化発展する彼女の本質を的確に把握している。しかしいくら変化しても、イメージはあくまでもイメージにすぎず、彼の中では決して本質とつながってはいない。彼は、**Toni** の中にか

20) Werke, a.a.O., S. 170

つての恋人との類似性を見出し、**Toni** を **Mariane** に同一化させようとしているものの、完全には同一化しきれないでいる。**Toni** は、彼のかつての恋人に最も近い存在ではあるが、同一存在を越え出ることにはできない。その理由は、彼女の膚が彼にかすかな不安をかもし、彼の意識の中に黒人娘のイメージを連想せしめるモメントになりうるからである。**Gustav** の黒人に対する不信の念は、**Toni** のまわりに目に見えないヴェールをめぐらしている。従って悪魔から天使へと変化したイメージは、このまま変化しないという保証は全くない。むしろ大きくイメージは変わるのではという予感を、**Gustav** と **Toni** の内的関係は与えるのである。イメージが本質につながっていないところに、変化するという内的要因が成立する。外的要因は、状況の突然の変化である。この二つの要因が重なる時、イメージは、また天使から悪魔へと変化する。

ここで問題になるのは、状況の変化である。**Gustav** は甘美な夢を見ており、**Toni** は同じ部屋で彼を見守っている。この時突然 **Hoango** が帰宅する。**Hoango** の帰宅は、**Gustav** の死を意味する。重要であるのは、この事態に対応する **Toni** の行動である。取るべき手段は二種類しかない。第一の手段は、**Gustav** を起こすことであり、第二の手段は、彼をベットにしぼりつけることによって黒人の直接的行動を阻止することである。第一の手段を選ぶと、彼の死はより確実になると **Toni** は判断する。というのは、彼が逃げのびる余地は、全然残されていないからである。従って彼女は、彼をベットにくくりつけて偽装工作に出るのである。この行動は、結果的には功を奏するけれども、**Toni** の意図は、**Gustav** には全く理解されない。と言うのは、彼は彼女のこのような行動を、変節的裏切りと考えてしまうからである。彼がこのように理解するのは、ひとえに黒人に対する不信の念で **Toni** を判断するからに他ならない。つまり彼は、彼女をイメージだけで把えているため、彼女の分裂した行動の逆接的価値を認識できていないのである。それ故彼は、感覚的印象に支配され、彼女のイメージは天使から悪魔へと無条件に変化するのである。

Toni のイメージは、まず悪魔から天使へと変化した。そして最後に天使から悪魔へと変化する。彼女のイメージが天使から悪魔へと変化する時、彼女の世界は崩壊する。彼女を殺害することは、過去の過誤のくりかえしである。彼女の殺害は、かつての恋人の見殺しに等しい。彼にとって過去の不覚の過誤は、いやしえぬ傷である。従って彼は、事の本質を理解した時、はじめて自己の行動の意味に気付く。彼女の殺害は、自分の手で自己の誤った判断に基づいてなされただけに、彼にとって自己否定によってしかつぐなえない。

ここに到って彼は、はじめて彼女の最後の言葉を素直に受け入れることができる。「ああ私をずっと信じて欲しかったのに！」という最後の言葉に対して、彼は同じように、「ああ僕は君を、疑うべきではなかった」と答えている。

...„ich hätte dir nicht mißtrauen sollen!“²¹⁾

Gustav の発言は、**Toni** のそれと内容的にも言語的にもぴったり符合している。この符合は、死を前提にした時始めて成立する。そして死を前提にした時にはじめて、**Toni** に対する不信の念も消失するのである。„mißtrauen“ は、死と関連したネガティブなモチーフである。当該作品は、この „mißtrauen“ によって貫かれている。この „mißtraun“ は、当該作品の核をなしている。この否定性が一貫しているところに大いなる説得力が秘められているように筆者には思われるのである。

21) *ibid.*, S. 193